2/24 毎日

行き場のない女性路上生活者

自助といわれても

殴られ死亡 人ごとでない

東京都渋谷区のバス停で昨年11月、路上生活者の女性が男に頭を殴られ死亡した。その境遇を自身に重ねる女性がいる。山野恵美さん(38)=仮名。非正規雇用の仕事を転々とし、路上生活も経験した。昨夏には、新型コロナウイルスの影響で日雇いの仕事も失った。「将来、自分がぽつんと一人でバス停に座る姿が浮かぶ」と語る女性に、話を聞いた。【木許はるみ】

事件が起きたのは11月16日未明。渋谷区幡ケ谷のバス停ベンチに座っていた路上生活者の大林三佐子さん(当時64歳)が、近所に住む男に頭を殴られ死亡した。大林さんは十数年前に上京したとみられ、約3年前にアパートを引き払い、昨年2月ごろスーパーの販売員も辞めていた。現場のベンチに座ったまま寝ている姿が住民らに目撃されている。起訴された男は「お金をあげるからバス停からどいてほしいと頼んだが、断られて腹が立った」などと供述しているという。

配者は昨年12月6日、渋谷区の代々木公園周辺で開かれた大林さんを追悼するデモで、山野さんと出会った。「ずっと日雇いで暮らしてきて、コロナで仕事もなくなった。野宿していたこともあるし、全くひとごとと思えません」。声を振り絞るように語る姿が気になり、後日、都内の公園で落ち合うことにした。

山野さんは2005年に関東の大学を卒業して以降、人材派遣会社に登録し、日雇い中心に非正規の仕事で生計を立ててきた。だが30歳近くになった時、居候先の友人が失業し、住む場所を失った。さらに東日本大震災とその後の社会不安の増大で、もともと不安定だった山野さんの精神は変調をきたし、「仕事を探す気力がなくなった」。

生活保護の申請も考えたが、「当時は受給者バッシングも強く、行政窓口でプライバシーをさらけ出すのも生活をずっと管理されるみたいで抵抗がありました」。行き場をなくした山野さんは11年秋、都内の河川敷で暮らし始めた。事業所などから廃材や段ボールを集めて体一つが収まる小屋を作り、水は公衆トイレの手洗い場から調達。早朝から自転車をこぎ、捨てられたアルミ缶を集めて業者に売ったり、日雇い仕事をしたりして生活費を稼いだ。

「ただお金のない人が暮らせる場所が減っている。このベンチもです」と話す山野さん。この日座ったベンチにも取っ手があり、寝そべることができないようになっていた=東京都内の公園で2020年12月10日、木許はるみ撮影

不快な思い、日常

だが路上生活は楽ではなかった。冬は布団や毛布にくるまってしのげたが、「夏は暑さがきつくて。ネットカフェに泊まりに行くこともあった」。小屋に寝ていて若者たちにロケット花火を打ち込まれるなどの嫌がらせを受け、「ちょっとした物音でも身構えるようになりました」という。

さらに予想もしなかったのが、男性からの性的な声掛けだった。「アルミ缶をあげるからついて来なよ」「お金をあげるから、ちょっと付き合わないか」――。アルミ缶を回収している時や小屋で寝ている時、中年の男性が声を掛けてくることが何度かあった。「野宿している小屋を通り過ぎた後、女がいるので男性が引き返してくることもありました。『おじさんこの近くに住んでるんだけど、ちょっと来ない』って」。路上生活を始める前は街でナンパされたりすることはなく、「きれいとか、かわいいじゃなく、『貧しい女だから簡単に言うことを聞くだろう』。そういう視線を感じました。今思い出しても気持ち悪いです」。

いくら不快でも強い態度には出られなかった。周囲は男性ばかりで気軽に相談できず、行政からも日常的に立ち退きを求められていたからだ。「仕返しが怖いので笑ってごまかしながら、翌日からなるべく遭遇しないようにしました。一回でも声掛けがあると、しばらく嫌な思いで頭がいっぱいでした」。何かあれば逃げられるよう寝る時はジーパンをはき、周囲に知らせられるように笛を近くに置くようにしていたという。

「大林さんの事件も、男は『お金をあげるからどいてほしい』と話したそうですね。『断られて腹が立った』と。私が受けていたような視線を感じます。『お金をあげれば言うことを聞かせられるだろう』と」

厚生労働省によると、19年の路上生活者の人数は4555人、うち女性は177人で圧倒的少数だ。炊き出しなど支援する側のスタッフも男性が多い。

「女性が少ないので嫌なことを言われたりからかわれたりして、炊き出しに行くのを嫌になったという話も聞きます。命に関わることなのに、支援の集まりにも行けない。『支援してあげるよ』と言われても、警戒するだけの理由があるんです」

コロナが追い打ち

山野さんは、立ち退きを求める行政とのやりとりに疲れ、15年ごろから家賃2万5000円のアパートで暮らし、運送会社の単発の仕事で生活をつないだ。だが、今度は新型コロナで生活が一変する。繁忙期の春にも仕事はなく、昨年7月下旬の仕事を最後に会社からの連絡は途絶えた。わずかな貯金も取り崩し、再び路上生活も考えたが、諦めた。「路上にも公園にも住める場所がなくなっていました。ベンチで横になって生活するにも、監視カメラで見られていて、すぐに警備員が来てしまいます」

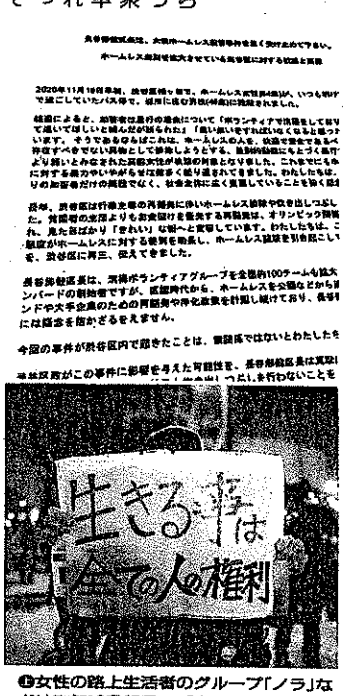
結局、山野さんは昨年9月、同年代の知人に倣って自身も生活保護を申請。月額8万円の生活保護で暮らしている。新型コロナのしわ寄せは山野さんのような不安定な女性に向かっており、若者の貧困問題に取り組むNPO法人POSSEが昨年2～11月に行った新型コロナ関連の労働相談では、3304件の相談のうち6割を女性が占めた。女性相談者の7割は非正規雇用だという。都内の女性路上生活者グループ「ノラ」によると、昨夏ごろから中年の女性の路上生活者が増え、嫌がらせも増えているという。「普段から脇に追いやられている女性の立場が、新型コロナでもっと厳しくなっている」と話す。

山野さんは言う。「亡くなった時だけ報道されますが、実際は路上生活者への膨大な数の嫌がらせや暴力があって、事件は氷山の一角です。私もこれから仕事が見つかったとしても、非正規の仕事しかないと思います。自分が年齢を重ねて大林さんくらいになった時、頼れる人もいなくて、バス停でポツンと座っている姿が浮かぶんです」

◇

菅義偉首相が目指す社会像に「自助・共助・公助」を掲げた。だが自力ではどうにもならない困難を抱える人たちの姿が、私たちにはどこまで見えているのだろうか。現場から配者が報告する。

＝随時掲載



❶女性の路上生活者のグループ「ノラ」などは昨年12月25日、「ホームレス差別を拡大させている東京都渋谷区に対する抗議と要望」として、区に文書を提出した
❷路上生活者の女性が襲われて死亡したことに抗議するデモの参加者＝渋谷区で同6日、丸山博撮影